

# 新創世記



原作：詠人不知

翻譯：藏小路夕マ



ハイ、世田谷ネコのタマだよ。

この長い長いお話もいよいよ最後です。象印魔法瓶を全部開けて、トイレットペーパーの最後の一卷まで読んだから、これで完訳することになります。あっ、一部つまらない箇所は飛ばしたけどね。

もしかするとシリーズ中で今回が一番難しいかもしれない。なんたって「認識」と「存在」が大きなテーマなんだから。アタシも訳してて本当に困った。訳語が見つからないだけじゃなくて、論理展開になかなか付いて行けなくてさ、論理の収束するところを考えたら、「ギャオーッ！」って叫んで、ミッシャンに睨まれた。読者の皆さんはアタシより頭いいから、すべにわかると思っけど。それで視界がぼやけてきたら、ま、そーゆーことです。宇宙の『在りよう』の真実、ってどこかしら。

だけど所詮これまでの続きだから、ワケわかんなく難解ってことじゃないです。謎解きってわけでもない。神様といっしょに「えっ、ホントはそうなの？」って思いながら読んでもらえれば、自然と全部わかるはず。ま、わかったところで人生の活力や明日への希望には絶対になんないのは保証するけど。なお原典の線文字B文書はヒシャーズ王国のネコペディアで読めます。んじゃ、ごーぞ。

蔵小路タマ

## メトセラ族

こうでなくちゃいけない。のどかな生活こそ自然なのだ。何も無いのが一番いい。世界がせせこましいのは犯罪に匹敵する。生きてるだけでも面倒なことがあるのに、わざわざ波風立てて余計な心配事を作り出すなんて、本当にヒマじゃなきゃできない。バタバタ動き回るのは不自然この上ない無作法で愚かな振る舞いだ。

体の右側を下にして寝ていた神様は、あばら骨あたりが少し痛くなった。一度起き上がってノビをして欠伸し、今度は左側を下にして横になった。これでまた二時間は寝ていられる。

「ご無沙汰しています。こんにちは」ネコの声が聞こえた。

無粋なやつめ。一体誰だ。薄目を開けると見知らぬ白ネコが立っていた。

「誰？俺は今、瞑想中」

「お邪魔してすみません。僕を憶えていませんか？」

ほら、マリアのシッポから作ってもらったオスネコです。今ではシメオンって名乗ってます」

「へ？もしかして創世記の？生きてたの？」

「はい、お陰様で元気です」

神様は起き上がって座り直した。

「うん、たしかに元気そうだ。今までどこにいたの？」

「黙って消えて申し訳ありませんでした。あのとき、マリアの子どもが僕のじゃないとわかって、ものすごいショックで、いっそ死のうと思っただんです。それでワニに食われに行ったら、ワニに諭されました。死んで花実が咲くものかと懇々と説教されました。でも、カナンにはいられないから、人間世界に渡って、ずっと放浪していた次第です」

「そうだったのか。だいぶ苦勞させちゃったみたいだ。ごめんよ」

「いえ、神様のせいじゃありませんよ。誰のせいでもない。強いて言えば僕の不甲斐なさ」

「まあまあ、湿っぽいのはやめておこうよ。水でも飲みな」

神様は椰子の実を割った茶碗をすすめた。オスネコは神様に歓迎されて安心したようだ。

「カナンは変わっていませんね。生まれ故郷だし約束の地だし。気分が良すぎて眠くなりませう」

「そうだろ？ だから俺はいつも寝てるんだ。何の心配も疑問もないから」

「あつ、そうだ。放浪してて疑問がひとつ湧きました。とても不思議で、どうしてなのかと」

「俺にわかることなら答えるよ、言ってごらん」  
「はい、それは寿命についてです。僕だけ歳を取りません。他のネコはよく生きてても三十年なのに、僕は生まれたときのままで、今でも元気で、まるでずっと三歳みたいな気がします。どうしてでしょう？」

「そういえばそうだ。カナンでもマリアと子どもたちやウサギのオヤジ、雲のサル、白へび、麻雀仲間のサルたち、気の合うナマケモノなど、神様の身近にいる動物は歳を取った気配がない。アダムとイブも世俗の垢にまみれて老練にはなったが、歳をとったわけでもなさそうだ。これは不思議だな。」

「なるほどねえ。たしかにそうだ。俺が不老不死なのは良くも悪くも事実だけど、動物たちまで不老不死なのかな。ごめん、今はわかんない。調べとくか」

「ら近々また来てくれるか？」

「はい、また来ます。ここでは特に仕事がないんで、毎日ヒマですから」白いオスネコは帰って行った。

もしかして、俺が何かを間違えたのだろうか？ と神様は思った。動物たちが歳を取らないなんて、まあ、マリアや子ネコに先立たれたら困るから、結果としてこれでいいにしても、やっぱり気になる。俺の間違いか、それともそういう決まりなのか。

「おーい、テレパシー」

「お呼びです。結論から言っ、神様のズボラさが原因です」

「俺が何かしたか？ いや、何をしなかった、かな？」  
「後者です。神様が動物を作ったときに使った『新世界で行こう』は、まだ完全にこなれていないソフトでした。不要な変数がいっぱいあって、神様は入るべき変数を入れなかつたんです。動物の種類ごとに平均寿命を決めたところまではいんですけど、その三行下に『成果品の耐用年数』っていう項目があつて、デフォルトでは無限になってました。本当ならそれを消して、平均寿命と同じ時間を入れるべきだったんですが、神様は無視しました。それ

で、生まれた動物の寿命が無限になった、というわけですよ」

「ん？ ていうことは、アホなデフォルト設定と、意味不明の変数名が悪いんじゃない？」

「そつとも言えます。けどね、ソフトなんて、作った人は徹夜の連続でアタマがボケてます。だからどこに落とし穴があるかわかりません。ワケわかんない変数が出てきたらマニュアルを見るべきだった、とも言えませんか？」

「あんどきは急いでたからな。にしても、成果品の耐用年数っていう表現は、まるっきり妥当じゃないな」

「多分、開発時の表現がそのままスルーしたんでしょ。うね。ソースコード書く人は、普通の文章なんか書けませんか」

「そうか、やっぱりこれからは個人の能力の多様化と万能化も課題だな。とにかく謎は解けた。結果としてカナンのオリジナルメンバーは、めつたなことじゃ死なないってわけだ。メトセラってわけだ」

「メトセラより長生きしますよ。いいじゃないですか。世界を最初から知っている彼らがこれからも世

界をリードして行くなら。同じ間違いは繰り返さないでしょう。実際、今そうなってるから神様は草むらで居眠りしてられる」

「居眠りではない。瞑想」

「どっちでもいいです。ソフトの半バグが原因でも、メトセラ族は結果オーライでしょう」

その後、神様が観察したところによると、メトセラの血は時々遺伝するらしく、イエスとノア一族にもその傾向が見られた。マリアの十二匹の子どもは、神様が父親だけに完全なメトセラだった。

## 共通認識基盤

イエスと仲間たちの寄宿学校は順調に運営されていた。動物の保母さん保父さんが決められたシフトを守らないのだけが悩みだという。気分次第で勝手な時間にやって来て、人間の子どもに遊んでもらっているらしい。

「まあいいじゃないか。子育ては二十四時間が教育だよ。俺も苦労した」と、神様はわかったようなことを言った。マリアの子どもたちは神様が雲隠れしている間に成長し、神様は子どもが生まれたことさえ知らなかったのだ。どう苦労したのだろうか。

情報部、外務省、カナン軍などから毎日報告のメールが来る。全部「異常なし」だ。カナンテレビも偵察カメラの映像がなくなったので、ろくな番組を送しなくなった。最近の話題は黒アリと赤アリの縄張り抗争。腕力の黒アリに対して数の赤アリだが、両方とも子どもが多くて絶滅しそうにないため、神様は仲裁する気にならなかった。ヘタにやめさせたら、それこそ自然界のバランスが崩れてしまうし。

景色も見飽きた、テレビはつまらない、寝るのに疲れた。忙しいよりヒマがいいのはわかっているも、これだけ徹底してヒマだとなあ。何かすればいいのだ。どっちみち意味ない時間なら、無意味なことをしても悪くはあるまい。さて、何をしよう。どうせなら自分にしかできないことがいい。そうだとか、我が創造、なんていうのもいい。なるべくドラマチックに、後世に残るような名作にしたい。けど、記憶力に多少の不安はある。たしか、最初に作ったのはネズミだが、次は何だっけ？

「おおい、ちよっとお」とテレパシーを呼んだ。

「最初に言っときます。記録はありますがメモは廃棄しました。残っているのは銀河連合統一書式の正式文書だけです。だから無理です」即座にテレパシーが答えた。

「返事が早いね。記録があるなら読ませてよ」

「無理だと言ったでしょう」

「手に入らないの？」

「いえ、いつでもタブレットに表示できますよ」

「じゃ、今すぐ頼む」

「あのお、おわかりではないようですね。銀河連合の統語法ですから、最初の一日分だけでも数億ページになります」

「あつ、あれか。枝葉はつきり長くて、本筋が全然見えなくて、すぐに哲学しちゃうやつ」

「ま、そう見るのも間違ってますね」  
「あれを読むのは気が滅入るな。ねえ、要約してくれない？」

「いやです。誰がやっても神様と同じ労力が要りますから」

「んともう、使えない書類だな。もっと簡単に書いたっていいと思うんだけど、お役所は面倒なのが好きなの？」

「いいえ、面倒なのは誰だって嫌いです。一番簡単に書いたものでも数億ページなんですよ」

「よくわかんない。どういうことだ？」

「説明しましょうか？簡単です」

「じゃ、本当に簡単にやってくれ」

「はい。ええと、神様がウサギの餅を食べたとします」  
「オヤジの餅だろうな。他のは旨くない」

「たとい話ですから、誰のだっていいでしょ。でも

わかりました。ウサギのオヤジの餅です。それで、食べ終わったけれども少し食べたかったとします。神様はオヤジに『もうちよっとくれないか』と頼んだとしましょう」

「あいつは親切だから、餅ならいくらでもくれるよ」

「少し黙っててください。話がちよっとも進まないで、オヤジは追加の餅をくれました。ダンゴムシの半分くらいの大きさです」

「そりゃないよ。そんなちよっとじゃ足しにも何もならない」

「じゃあ神様がそう言ったとしましょう。そしたらオヤジは、椰子の実の五倍くらい大きな餅をくれました」

「違うだろ。俺は『もうちよっと』って言ったんだよ」

「はい、そこです。神様の『ちよっと』とウサギのオヤジの『ちよっと』が違ってたわけですね」

「んなことあり得ない。常識の問題だ」

「へええ、常識って万国共通、宇宙全体で通用するんですか？ たしかにウサギのオヤジと神様は同じ常識だろうから、餅のサイズの間違いは起きないでしょう。神様もウサギも同じカナンで暮らしていて、

同じような価値観を持ってますから、常識も同じだし言葉もすんなり通じるわけで、それができるのは共通認識の基盤があるからです。でも、宇宙はおるか、この地上だけでも生き物の種類が違々と通じない言葉もあるでしょ？」

「ああ、子ネコにいくら静かにしろって言っても通じない」

「そういうんじゃないやなくて、たとえばネコには『音の影』が見えます。人間には見えない。人間は『塩味』がわかります。でもネコは塩味を感じない。ネコ同士、人間同士で話しているには問題ありませんが、ネコが人間に音の影ってどう見えるのか説明したり、人間が塩味をネコに説明するとしたら、どうすればいいでしょうね」

「無理だな。そこは翻訳しない」

「んな無責任な。銀河連合の公式文書で『翻訳不能』は許されません。全宇宙に散らばっている様々な知性体に、可能な限り誤解を少なく、可能な限り詳細な内容であることが求められます。」

ですから翻訳の元になる単語は厳選されたものでなければならず、翻訳にあたっては、用法に鑑みて

再定義しなければなりません。たとえば同じ『歩く』でも、ベニハナ才星の生命体では無ベクトルの次元移動ですから。ネコや人間の『歩く』とは少し意味が違うんですよ」

「知らないよ、そんな星。そいつらに俺のこと知らせなくともいいじゃん」

「別に神様のことだけを宇宙に知らせるのではなくて、宇宙のすべての出来事を宇宙のすべての知性体に知らせているんです。共通認識基盤なんてアリの糞ほどもないですから、言葉はすべて再定義されると思ってください。だからものすごく長くなってしまいうわけです」

「やだねえ、そんな不毛な仕事」

「しょうがないでしょ、決まってるんだから。でもそうですね、たしかに不毛かもしれない。再定義って言いましたけど、定義という行為自体、言葉を言葉で言い換えてるだけなので、結局のところ通じないのかもしれないなあ」

「通じたか通じなかったか調べないの？」

「誰がそんな面倒なことします？ いいんですよ、書きっぱなしで。どうせ誰も読まないんだから。役所

の文書なんてそんなもんです」

「ますます不毛。誰も読まないだろう面倒な文書を、せつせと書くなんて、生きてる動物のすることじゃない。適当な文字並べて誤魔化しちゃえば？」

「それがねえ、そうもいかないんですよ。ときたま査察が入ります。無作為で文書を選んで、統語法に則っているかどうか調べる係がいますね。チョンボがばれると銀河系統語法士の資格を剥奪されてしまふんです。そうなれば永遠に暗黒世界勤務ですよ」

「統語法士？ そんな資格があるんだ」

「もちろん。下はB級三班から上はS級一班まで、上に行くほど待遇は良くなります。神様も受験してみますか？」

「面白そう。やってみようかな。だけど難しいんだろ？」

「いや、B級三班なら簡単です。毎回同じ問題ですから」

「どんな問題？」

「第一問は『地面を掘る』を統語法に即した文章表現にせよ、っていうものです。第二問は『時間が痒く』ひず」

「第一問は簡単じゃん。穴掘ることって答えればいいんだよね」

「ダメです。宇宙には、真空・無重力の空間に漂いながら存在する知性体もいっぱいいますから、彼らには地面がわかりません。掘るっていう動詞も意味不明です。さあ、どうしますか？」

「そりゃ困った連中だ。『時間が痒い』は意味わかんないし、うん、受験はやめた。その代わり、必死に思い出して自伝を書くことにしよう」

「神様の自伝？ 一体誰が読むっていうんですか」

「誰も読まないかもな。読み手がいなければ不毛だと思おうか？」

「ええ。紛れもなくほぼ不毛でしょう」

## 唯我独存

河南寺の三匹は毎日人間の寄宿舎に通って、子どもたちの遊び相手をしていた。それも修行なんだそう。そして毎晩、子どもが眠ってしまった後になつてから、終わりがまったく見えない大仕事に取り組んでいた。旧世界の人間が残した膨大なテキストの整理だ。読み捨てにされる雑誌記事から、書いた人だけは高尚だと信じていた哲学書まで、ありとあらゆるテキストを、まずジャンル別に分けようとアベルが思い立ったのだ。

なにしろ破壊が迫った中、大急ぎでかき集めた資料だけに順番もグレードもわからない。しかも人間の言葉は数限りなくあつて、文字まで違う。とてもじゃないが三匹でできる仕事ではない。まずカインが降参し、ヨハネも無理だと投げ出した。最後にはアベルもしぶしぶ不可能なのを認めた。その代わり、宗教関係、とりわけ天竺教のテキストを選別することの方針転換を主張し、他の二匹は、あまり気乗りしないまま了承した。ネコには荷が重すぎるなあ。

だけ整理してネットで公表したところ、黒ヒョウたちが興味を持ち、研究会が発足したらしい。

ところで、イエスの宗教の元になったエルサレム派は、世界的にはたいした勢力ではない。ことに、イエスが一派として独立して以来、拡大はほとんど止まってしまい、信者を限定する民族主義的な色合いが濃厚になった。加えて、その独特の価値観から拝金主義的な側面も強まっている。これほど民族や利権と結びついた宗教も珍しいが、まあすべて終わったことだ。新世界で再生する可能性は皆無だろう。

天竺教に限っては、これまた様々なテキストがあつて、書かれた年代はテキストに使われている言語から推測できるだけで、それが先でどれが後か、まるでわからない。書かれている内容も、あからさまに矛盾はしないものの、簡単に言えば『いろんなヤツが言いたいこと言ってる』状態。三匹の間でも、どのテキストが一番優位なのか意見が分かれ、徹夜で討論することもあつた。いわゆる教相判釈である。ときには熱くなつて言い合いにもなりかけた。宗論はどちら勝つても釈迦の恥なのはわかつていても、

分別は簡単ではなかった。マジな哲学書には必ず宗教の影があり、哲学と宗教の線引きはとても困難だ。また、煮詰まった宗教理論テキストの内容は御伽噺とさして変わらず、宗教とは認め難いものも非常に多くあつた。作業を進めるうち、三匹には大きな疑問が湧いてきた。宗教って一体なんだ？「やるんじやなかった」ヨハネが言った。

「迷つてこそその宗教だろ」とカイン。  
「意味が違うよ」とアベル。

それでも苦勞した甲斐あつて、旧世界には大きな宗教が三つ、その三つと関係なさそうなコマゴマしたのが沢山、三つのどれかから誤解したり分派したりで全然別物になつた宗教がやたらと沢山あることがわかつた。人間って、宗教が大好きだったみたいだ。

そのうちふたつ、天竺教とイエスの宗教は、すでにカナンに入ってきている。三つ目の遊牧民の宗教は、どうやら歴史的にも新しいらしく、エルサレム派と同じルーツを持ち、イエスの宗教とも交流があつたようだ。三匹がこの遊牧民の宗教を、できる

つい熱くなるのだ。

旧世界の人間の歴史では、そんな言い合いの末に、天竺教は多くの宗派に分かれたらしい。でもカナンでは、イエスの「般若心経だけでいいじゃない」の一言で、三匹とも「それでいいや」に落ち着いた。

「本当に色即是空ですね」イエスが言った。

「もののはれを感じるな。気に入らなかつた世界だったにしても、爆弾一発で瞬時に滅ぶとは。方向違いだったにしても、人間の努力や苦勞つてなんだったのかねえ」神様も旧世界に思いを馳せる。

「この世で変わらないものって何でしょう？」

「今、だよ。過去はあやふやだし未来はわかんない。今だけはいつも確かにある」神様にしては良い答えだ。以前、何万年も一匹で漂流していたとき考えたことがあつたから即座に答えられた。でも、本当のことを言うと、この答えにも疑問が残る。『今』を感じている自分自身がなくなつたら、それでも『今』はあるのか。つまり、『今』は自分の内側にあるのか外側にあるのか、といったあたりで神様は面倒になつて考えるのをやめてしまつていた。

神様の答えにイエスは感銘を受けた。そういうことだ、般若心経も常に今ではないか。来世の予言など書かれてはいない。今の今の今を見るということなのだろう。でも、やはり滅亡した世界へのレクイエムは、何かしらあってもいい気がした。

「イエスさん、五歳児が歌を教えるとダダこねてます」赤いオオムが飛んで来た。

「わかったよ、すぐ行きます。神様、また来ますね」イエスは寺町通りのほうへ走って帰った。

「ヒマそうだけど、お時間ありますか？」テレパシーだ。

「時間はあるよ。貸してやるほどは無いが」腹の毛を舐めながら神様が答えた。

「ええと、久しぶりに長老会議から指令書が来ました。読みますか？」

「厚さは？」

「短いですよ。六万七千ページと少し」

「五枚以下なら読む」

「だろうな。そう思っただけまとめました」

「いいんですか？ 強引に無視してもいいですけど、またヤマト型宇宙戦艦が来ますよ。今度の隕石は少し大きめかもしれませんね」

「また脅迫して」

「いいえ、リスク管理です。常に最悪の状態を考えないと。都合の悪いシナリオを想定外なんて棚上げすれば、たかが地震で原子炉がメルトダウンします。そうなのでもいいんですか？」

「いや、困る。困るには困るけど、正直なところ、今のカナンには俺なんか居なくていいなって、どことなくチラチラと感じ始めてたんだ。長老たちは察したのかなあ」

「そうかもしれません。長老たちは心の底にひがみ根性を詰め込んでますからね。そのぶん洞察力は鋭いです」

「ひがみと洞察力と関係あるの？」

「ひがみって過度な洞察の結果じゃないですか」

「そうか、そういうものか。いや、俺も最近、他の動物に影響力を及ぼすシーンがなくなってるね、全部子どもたちやイエスがやっちゃうのだろ。どっか浮いてる気分なんだ。本当はアリのたちの土木工事現場な

「その要旨を、もっと要約してくれるか」

「はいはい、できてますよ。項目としてはふたつ。まず、今回の破滅騒ぎを收拾した手腕を褒めてます。ねえ神様、長老たちが褒めてるんですよ。宇宙も終わりに近いかも」

「長老は、いつもは褒めないの？」

「まったく前例がありません。常に揚げ足取りかカクンシヤク起こしてるだけで」

「まあいいや。副賞に金時計でも付かなければ嬉しくない」

「そう言っときます。で、第二項目は、転勤です。可及的速やかに現在地を離れること、となってます」

「なに？ 何て言った？」

「転勤ですよ。この地上から出ると」

「そんなあ、あり得ないだろ。俺がここを作って、やっとなみやすくしたところなのに。出て行って、どこに行けって言うてるの？」

「さあ、わかりません。書いてないもので」

「転勤先も決めないで職場を離れるってか。そんなムチャクチャな指令は聞こえないよ」

んかに行ってみたいけど、偉い役人の災害現場視察みたいになりそうで。ありや迷惑以外のなんだってんだ」

「賢明です。相手にされない程度ならいいですが、邪魔もの扱いされるようになったらおしまいですから」

「だろ？ だから現場がわかんないんだ。昔だったら俺が出てって仕切るシーンでも、最近は現場レベルで解決しちゃうみたいだし。もうカナンに俺は要らないのかなあ」

「冷たいようですが、たぶんそうでしょう」

「そうか、考えるまでもない、か」

「神様が考えるんですか？ 考えられるんですか？」

「それ無理。俺は感じるまで待つタイプだから」

神様は珍しく沈黙した。何かを感じるまで待っているのか、言いたいことが言葉にならないのか、それとも理由なく黙っているのか。

白い花に蝶がとまるのを見て、神様は口を開いた。

「あのなあ、こんな風景見飽きたって思おうとしたけど、本当は全然見飽きてないんだ。あと千年見てもいい。だけども、見飽きてから引越すのって、

もつと淋しいかもしれない。だから行くよ。どこでもいいや。ただ、一匹ではヤダ。この世界作るまで、ずーっと一匹でいたろ？ あんときは他に動物がいるなんて知らなかったから、まあ我慢できた。でも今はみんなと一緒にいるのに慣れちゃって、一週間だって一匹じゃいらんない。俺、マリアを連れてく。頼めば来てくれるだろう。それからテレパシー、あなたも来てくれ」

こんなにしおらしい神様は初めてだ。今までも素直といえば素直だったが、それとは違う。

「わかりました。マリアは神様が作ったんですから、いわば神様の一部でしょう。それから、この私も実は神様の一部、いえ、神様そのものですからいっしょに行くしかありません。ねえ神様、気付きました？ 今、私は『私』と一人称単数を使っただけです。これは創世記から通して初めてのことです」

「そうだった？ 気にしてなかった。どうしてまた、これまで使わなかったの？」

「言ったでしょ。神様の一部ですから独立したキャラクターではないんです。テレパシーっていう呼び名だって、神様が勝手に付けただけです。私は神様

の心の半分、能力の大半、融通の利くアンチテーゼなんです」

「待つてくれ、よくわかんない。てつきり宇宙のどこかに住んでる小役人かと思っただけで、俺なの？」

「ええ、だから神様以外とはスムーズに話ができません。マリアや子どもたちとは、ごくかすかに通じます。親子ですからね。ついでに言うとうと、銀河連合も長老会議も、全部神様の一部です。心にはいろんな側面がありますから、いっしょくたにすれば混乱します。特に神様のような重責を担う場合は。なので別個の存在として認識するようになってました」

「えーっ、嘘ついてるな。長老会議も銀河連合も全部俺だったなんてあり得ない。たとえば俺が俺に爆撃命令出すかよ」

「出します。実際出したでしょ。罪悪感つて一言では片付かない、込み入った精神状態を終わらせるにはあれしかなかった。違いますか？」

「わかんないよ。そんな難しいこと言われてすぐわかるくらいなら、もう少し出世してる」

「じゃ、今夜にでも事実を整理してください。いい

ですか？ 混乱すべきことじゃないです。誇るべきことです。だって、神様は本当に一匹だけの能力で世界を作り、失敗を取り戻し、再出発させたんですから」

「手伝わってくれた天使たちはどうなのさ」

「もちろん神様の一部です。神様の動的能力を象徴しています。一部でなければ、必要に応じて都合よく何万匹も出てくるわけじゃないでしょ」

「うん、それは不思議だった。そうか、俺か」

「はい、すべてが神様です。この世界も、動物たちも、土地や空も、太陽と月も、草や木も、石ころの一個に至るまで神様なんです」

「えっ、もう一回言っつて」

「わかりませんか？ これは天竺教の考え方とはまったく違いますよ。私が言ってるのは、神様が『ここに世界がある』と認識してるから、その認識の範囲内で世界が『存在』してるということ。神様が認識しなくなったら、『存在』が確実に存在するかなんてわかりません。知りようがないですから」

「じゃ、動物たちはいないかもしれないの？」

「いないと思いますか？ いると思うでしょ。だから

『いる』んです。いいですか、神様が神様である所以は、この宇宙で、あつと、宇宙というのも神様が認識してるから存在するんですけど、この宇宙で、様々なものを『認識』して『存在』させる唯一の存在だから神様なんです」

「ますますわからん」

「それでは、この世界を作る前の神様の状態を思い出してください。どんなでした？」

「そうねえ、漂ってたというか、どこでもない場所で、何となく居た」

「周囲に何かありましたか？」

「いや、全然まったく。っていうか知らないよ。調べなかったから」

「もし調べてたら結果は違ったかもしれない。でも調べなかった。あのとときの神様の周りには、空間や無さえもなかった。光も闇もなくて、宇宙さえなかったんですよ。そこに神様は一匹、あるいは一個、あるいは一人だけで居たわけです。神様は何も『認識』していません。だから何もなかった、とも言えますけどね」

「うん、大体ほかに何かあるのか知らなかったから

な。なあ、宇宙には他にも神様はいるの？」

「いません」

「残念だな。いたら孤独な神様の会っていうのを作れたのに」

「そういう話じゃないと思いますけど。今のテーマは」

「悪かった。それで、あのときの状態がどうだったというの？」

「はい、あれが初期値です。あのとき、神様自身、自分がどういう姿形か知らなかったでしょ」

「うん、タブレットで自分撮りしてわかった。ネコみたいだった」

「それはね、たまたまネコのような形に見えただけです。それを信じたから神様はネコの形になったわけ、もしかしてミミズだったかもしれない」

「どんなミミズ？」

「そうだなあ、直径十一センチ、長さ八十九センチの透明なやつなんかどうでしょう」

「なんか大きなトロコテンみたいで締まらないね。数字だけは具体的にだけ」

「思い付いた素数を言っただけです。冗談はとも

## 最後の晚餐

全部本当だろう。嘘であつてほしいが本当みたいだ。ためしに小さな草の葉をじっと見つめ、この葉っぱは存在しない、と思つてみた。最初は迷いがあつて失敗したが、丸一日経つたころ、草の葉は見事に消えた。俺が無いと思えばどんなものでも無いのだ。

存在の不確かさを証明してしまつた神様はさらに落ち込んだ。落ち込みつつも、自分は一体何者なのだろうと想像してみた。宇宙のどこかを、誰にも見られず、誰をも見ないで漂う、寸法が素数の大型透明ミミズ。多分そんなもんだらう。今の状況を一番簡単に表すなら、透明ミミズが夢を見ているのに極めて近いのではないか。

ミミズは夢の中ではネコ型で、好き放題に世界を作り、そこに安住している。でも所詮は夢だ。夢を見続けたくても、いつかは目覚める。それはもうすぐなのだろう。だが今、自分は夢の中でその夢を分析しているのだから、多分、構造はもっと複雑に違いない。理解したくてもできそうもない。

かく、自分の姿も定まっていな神様は、いろんな現象や物や生き物を作り出して、どんどん『認識』して行つて、それらは『存在』になった。ただし、えーと、ここが重要です」

「どこが？」

「これから言うことです。つまり、この世界のいろんな存在は、神様にだけ認識されるものだっていうことです。もしもですよ、仮に神様みたいなのが他にもいて、その、みたいなから見れば、この世界自体、まったく見えない、存在しないかもしれない」

「俺にしか見えないのか」

「はい、その可能性は非常に高いです。だって、この世界全部は神様の思考の中、認識の中にしかないんですから」

神様は理解しようとした。ほんの少し理解しかけたところで、ネコには珍しくめまいを感じて倒れ込んでしまった。

いずれにしても儂いなあ。これ全部が夢なんて。

でもさあ、もしかして生き物の一生も、これと似てるんじゃない？ 生まれる前の記憶は、どの動物も持つていない。植物も同じだろう。そして死んだ後の意識もない。生きてる間だけ、そこに存在している認識できる。宇宙の長い歴史から見れば生き物の一生なんて、ほんの瞬間のこと。何かの拍子で水中から浮かび上がった泡が、少しの間水面を漂い、パチツと消える。泡の時間と同じ。

ということとは、神様である俺について言えば、世界を作つてから今までが泡の時間なのかもしれない。だって、世界を作るまで、ほんの少しだけ記憶はあるけど確実なものじゃない。これからどうなるかは、もっとわからない。

そうか、そろそろこの世界にお別れを言う時期なんだな。神様だから死ぬわけじゃないが、ちっとも慰めにはならない。やっぱり行くしかないな。長老会議からの転勤命令もあることだし。

あれっ、ちよつと待てよ。長老会議つて俺の中にあるんじゃないか？ 俺が俺に命令してるなら、「うるさいやい」って怒鳴れば済むじゃないか。

シカトしたって構わないはず。

「ちやいますよ、神様」テレパシーが割って入った。

「邪魔するな、一人で思いを巡らしてるときに」

「だって、違いますから。あのですね、生き物は自分の生まれる時期、死ぬ時期を決められません。神様に作ってもらうか、ある種の偶然によって生まれて、運が悪いと死ぬだけです。そこいくと神様は、自分でいつ出てくるか、いついなくなるかを決められます。今が消えどきってことです」

「ご親切にどうも！もうしばらく話しかけないでくれる？」

「はいはい。また大間違いいしたら出てきます」

覚悟を決めた神様は、マリアに子どもたちだけを集めるように頼んだ。ホテル・シオンのロビーに、明日の夕方。ホテルは貸切にしてくれ、と。

神様がホテルの営業に口を出したことはなかったので、「貸切」の依頼にマリアは驚いた。子どもたちだけ集めるって、何かのお祝いだろうか。記念日かな？いつもなら冗談で混ぜ返すところだったが、

さい声で言った。

「どう対応したらいいのか。すぐく困るよ」

「えっ、嬉しくないの？いつまでも死なないんだよ。っていうことは、いつまでも生きてるってことでさあ」予想外の反応に動転し、神様は当たり前のことを言った。

「そうだけど、未来がずーっとあるなんて、生き方の根本に関わるから」とハナポチ。

「いいじゃない。今までと同じに生きれば」神様はあくまで楽天的だ。

「そうするしかないけど、ちょっと気持ちの切り替えが必要だな」クロも同じ気持ちらしい。他のネコ全員もうなづいた。

「わかったよ。喜ぶと思っただけだな。お前たちは俺ほど単純じゃないんだろう。いや、俺は気を悪くしちゃいないからね。それから次の話だけど、結論から言うと、俺はカナンを離れる。この世界から出て行くことにした」

今度の反応は神様の予想通りだった。全員が跳び上がり、毛を逆立てて一斉に叫び出したのだ。もちろん全員が反対している。十三匹のネコが声を限り

今回は真に受けることにした。

「それほど忙しいやつはいないだろうが、集まってくれてありがとう。家族だけで集まるのは妙な気分だ。カナンが地上に戻ってからこれまで、さしたる事故もなくやって来られたのはみんなの協力あってこそだ。あたためてお礼を言おう」

「つまらない開会の辞は飛ばしてよ」マリアが叫んだ。「みんな眠っちゃおうよ」

「今日は眠るな。大切な話がいくつかあるんだ」

「なによお、大切って。ミーアキャットより？」ジルバは踊りたいのを我慢していた。

「うん、多分ね。じゃ、前置きはナシにして、まず良い話から。ここにいるみんなの寿命だが、ほぼ永遠だってわかった。他の動物には寿命がある。でもマリアと子どもたちは不老不死だ。メトセラ族っていつてね、首でも切り落とされない限り死なない。安心したか？」

全員を見渡したが、嬉しそうな顔をしているネコはいなかった。互いにチラチラ目を合わせたり、うつむいて腹の毛を舐めたりしている。ツンドラが小に叫ぶと建物まで揺れた。

「待て、こら、うるさいぞ。一匹ずつ言え」神様も叫んだが勝てるわけがない。仕方ないので自然に静まるまで待った。

「あたしたちを捨てて行くんだ。どうしてよ」キジシロが泣きながら言った。

「そうよ、無責任すぎる。もう一度世界が絶滅するまで面倒見るのが筋っていうもんじゃないの？」とマリア。

「きのうまで気配もなかったのに、いきなり出てくなんて裏切りだ」とクレバス。

「悪いと思ってるよ。お前たちの立場、いや全動物の立場からすれば、俺が出て行く理由はわかんないだろう。実際、俺だってうまく言えないんだから。言えないけどな、それ相応の、のつびきならぬ気持ちなんだよ」

長老会議からの転勤命令とか、存在と認識とか、神様は言うつもりはなかった。言ったにしても、うまく説明できる自信がなかったからだ。あくまで自分のわがままで通そう。ただ、河南寺の三匹は理詰めで来るかもしれない。そうなら最後の手段で

認識論を闘わせるしかない。

その河南寺の三匹を代表してヨハネが静かに言った。

「子どもとしては、とうちゃんがいなくなるのは寂しいよ。いつまでも近くで昼寝しててほしい。でも、それは僕たちの希望ではない。とうちゃんの希望は出て行くことだろ？僕はとうちゃんの希望を尊重する。もしいなくなっても、僕らにとつて、とうちゃんが『いる』から『姿が見えない』に変わるだけだ。消滅するわけじゃないんだから、とうちゃんの好きにすれば一番いいと思う。ほんとはヤダけど仕方ない」

一同は静かになった。ヨハネの言ったことを考えているのだろう。神様は救われたような、反面、子どもたちを裏切っているような、両方が混ざった複雑な気持ちで、顔を上げられなかった。

しばらくしてマリアが明るく言った。

「そうだね、行きたいなら行けばいいじゃん」

ネコの半分くらいは泣いていたが、マリアの言葉で吹っ切れたようだった。

「ただし、神様がどっかに行くならあたしも付いて

く。子どもたち、異議はないよね。考えてみてよ、神様一匹で何ができる？あたしがいなきや毛繕いもできないんだよ。そんな半端なネコを、どこだかわかんない場所に放り出せる？いつしよに行くからね。そう決めた」

嬉しかった。神様は心底嬉しかった。一匹ずつ舐めて回りたい気分だ。特にマリア、お前は最高のネコだよ。

「えっ、付いて来るの？弱ったなあ。長旅になるかもしれないし、居住空間は狭いし、食い物も飲み物も無いと思うけど」

「あんたさつき言つたら？あたしはメトセラとやらで不老不死だって。ていうことは、どんな長旅でも、飲まず食わずでも死なないってことだよ」

「そうだ。いや、マリア、俺は正直になる。そう言ってくれてありがとう。本当はね、俺から『付いて来てくれ』って頼もうと思つてた」

「まあ、そうだったんだ。やつぱ一匹じゃ何もできないって自覚してたんだね。そうと知つてたら、さんざん頼ませてから恩着せがましく『いいよ』って言うんだったなあ」

子どもたちは大笑いした。クロが「かなり仲いいね。どっかに落ち着いたら子ども作ればいい」とハナポチに言ったのを聞いたマリアは、「クロ、それはないよ。アタシは昔から年寄りが大嫌いだ。今ではもっともっと超嫌いなんだからね。お前たちは、

あたしが間違つた場所でクシャミしたから出来ただけ。そう、間違いの産物」

それから夕食になった。タンゴがウサギのオヤジに頼んで、特大の餅を作ってもらつていた。

「子どもたちには申し訳なく思つてる。母親を引き離しちゃうんだから。ダメな父親を持つたとあきらめてくれるか？」神様はみんなに言った。

「いいよ。もう子ネコつてわけでもないし。だけど、いつ出発するの？」キジシロが少し悲しそうに言った。

「いつでもいいんだけど、カナン みんなに話をする時間くらいはほしいかな」

「あんた、大切なことを忘れてない？イエスの子どもが生まれるんだよ。せめて頭くらい撫でてやってからにしたら？」マリアは世事に詳しい。

「もう子ができたのか。あいつめ、早業だな。いづごろ生まれるって？」

「あと五日くらい。コウノトリがそう言つてた」

「じゃ、切りよく一週間後に出発しよう。夜逃げじゃないから堂々と飛び発ちたい。その辺のプロデュースは誰かに任せていい？」

「うん、ぼくらが引き受ける。賑々しくなく、湿っぽくもなく、多少かつこよく演出する。一世一代の大仕事だ」タイガが請け負つた。

「俺も惜しまれるような旅立ちにしたいね。カナンに思い残すことはないって感じも出したい。ま、実際ないんだが、ひとつ言えば孫の顔を見られなかったことかな。お前ら、イエスの早業を見習え」

「とうちゃん、そりゃ無理つて言うもんだ。カナンのネコはぼくたちだけだから相手がいない。ネコ屋敷じゃあるまいし、近親繁殖しろつて？」ハナポチは、いつか言いたかつたようだ。

「えっ、そうだっけ？旧世界にはいっぱいいたけど」「そうかも shouldn't けどさ、今世界にいるネコはここにだけ」タンゴも不満そうだ。

「わかつたよ。もう一匹いるけどな。最初に作った

オスの白ネコ。旧世界から帰ってきてる」

「えーっ、あのバカ野郎、舞い戻って来てたのかい。思いっきり振られたくらいで逃げ出しやがって。あんなの数のうちじゃない」マリアはシロオスが嫌いなようだ。

「まあまあ、あれがいたところで事情は変わらん。今後のネコ繁栄のために、子ネコを何匹か作っておこう」

神様はクロに、新世界で行こうを立ち上げさせた。シミュレーションによれば、三ヶ月から八ヶ月の子ネコを、オスとメス合わせて三十匹作ると過不足ないという結果だった。

「こんなに少なくていいのか。ネコは繁殖したがるから、こんなもんかもしれない。変数は旧世界のネコと同じにしよう」と神様。

「メトセラにするの?」と、キジシロ。

「しないよ。世界をネコだらけにしたくない」

「つまんなーい。せつかくミアキャット踊り教えても、すぐ老いぼれちゃうなんて、ねえ?」ルンバが言うと、ジルバとタンゴも「つまんなーい」と繰り返した。

## 癸つ神、跡を濁す

あと一週間とわかってても特別な感慨は湧かない。すべきことはあるのだろうが、俺は何をしたらいんだ? このふんだと出発間にいろいろと大急ぎで片付けることになって後悔するだろうな。性格だからしょうがないか。

草原に寝転がって、神様はヒゲの手入れをしていた。

「とうちゃん、ぼくたちが臨時秘書になるよ。忙しいだろうから」

翌朝、神様の心を見透かしたようにクロとハナポチがやって来て言った。

「そっかい、頼むよ。俺はもう少し寝てるから」「寝てる?」だめ。これから行事が詰まっている。全部こなさないと出発できないよ」クロがスケジュールを書いたタブレットを差し出した。

神様は一目見て、あまりに項目が多いのに驚き、その場でやる気をなくしてしまった。

「なんだそれ。一年分のスケジュール?」

「わかった。じゃ、こうしよう。一度死んでも、あと八回生き返るってどうだ。ネコだけは九回生きられる」

「それは輪廻八回分が連続してネコってこと?」カインが訊いた。「善行を続けても悪行を繰り返しても立場が変わらないのは不公平だな。それに、来世は犬になりたいネコはどうすればいいの?」

「んな難しいこと言うな。わかったよ、八回生き返るのはオプシオンにしよう。もう一度ネコになるかどうかを自分で選べるならいいだろ」

「それならいいかもしれない」河南寺の三匹は納得した。

「クロ、こんな面倒な条件付きの変数でも設定できる?」

「うん、引数はいくらでも付けられるから。ほら、できた」

神様はそのままりターンを押しした。子ネコが三十匹現れ、みんなの顔をきよるきよる見回した。

ネコが九回生きられるようになったのは、このときからである。

「出発までに決まってるだろ。もうすぐエドが来る。まずカナン各地を行幸するんだ。いいね?」

向こうから馬が元気に走ってきた。背中には藁で編んだ鞍のようなものを付け、両側には金糸銀糸で刺繍した布が垂れている。よく見ると『神様』と大きく書かれていた。

「遅くなってどうも。ノアの奥さんが忙しくて、刺繍がやっとできたんで」

「やだよ俺。そんなお神輿みたいな鞍に座るのは、恥ずかしい」

「だって神様ですよ。これでもまだ地味なほうだと思います。どっちみち作り直してる暇はないんで、とにかく乗ってください」エドが鼻面を神様に押し付けたので、神様は仕方なく馬に乗った。

それから四日間、カナンの全地方を回り、神様は出会った動物たちと気軽に話をした。疲れた顔はできないから、ずっと上機嫌に振舞ったため、神様はなおさら疲れた。クロとハナポチは神様と一緒にエドに乗っていたものの、交代で眠っていた。二日目に神様は「三交代で眠ろう」と提案したが、もちろん「ダメ」と言われた。

「俺はそもそも頭脳派だから、肉体的には強くないんだ。それに生まれつき疲れやすい体質で、連続一時間以上の運動は医者から止められている」とかなんとかブツブツ言いながらも、神様は予定の行幸をやりぬいた。

内心では、カナン中回ってよかった、と思っていた。いろんな動物から声をかけられた。魚は水面に躍り出てくれたし、メトセラでもないのに創世記から生きている亀の爺さんとも会った。もつと前に、この行幸とやらをやっておくのだったな、と少々後悔した。

五日目には、まずイエスの寄宿舎を訪問した。人間の子どもとネコの子供が仲良く遊んでいて、初めて見る神様を珍しそうに取り囲んだ。

「ちよつと毛の色がヘンだし目付きが悪いけど、頭よさそうなネコだね」と、耳を引っ張られたりシツポを触られたりした。

イエスが飛んできて、「このネコは神様だから敬語を使いなさい」と大声で言ったが、神様も子どもたちにじやれついていたので説得力は皆無だった。

たちにより旨いものを出そうという目的は同じなんだから、レシピの競争だけで済む。赤い十字が付いていてもいなくても、親身になって看病することに違いはない。

神様は両派の天使にタブレットを数台ずつ与えた。自分がいなくなっても、これさえあれば動物たちと自由に通信できる。

六日目、神様はノアの家に行った。行幸で世話になつたエドが途中まで迎えに来た。エドの背中からあらためて見回した景色は、とても美しく、ああ、カナンはこんなに美しい！と心から思った。たいしたもんじゃないか。俺が作ったんだ。こんなにきれいな場所はもう二度と作れないかもしれない。これがたとえ俺にしか見えない景色でも、夢だとしても、これ以上はない完璧なパフォーマンスだ。どんなに優れた作品もいつかは手放さなければならぬ。そうだな、今が消えどきだろう。

ノアの牧場はものすごく広くなっていた。見渡す限りの草原で牛や馬が、気持ちよさそうに陽を浴びている。

「いいじゃん、子どもたちは優しいよ」と、神様のどが自然にゴロゴロ鳴った。

子ネコたちは「木登りの練習がしたい」と訴えた。神様は即座に松ノ木を三本生えさせた。

人間の子どもが「ぼくたちも登りたい」と言ったので、神様は即座にジャングルジムと鉄棒を作った。これを見て子どもたちは、このヘンなネコは神様なんだとやつと理解した。

次に神様は天使たちの給食センターと診療所を回った。驚いたことに、ガブリエル派と地獄派の天使がいっしょに仕事をしている。給食のレシピは一日ごとにどちらかが考えるが、みんなで作ったほうがラクだし楽しいとのこと。

これは診療所でも同じだった。ただ、当初は地獄派の天使が白い衣装を着るのを嫌がったという。そして、どうしても着せるなら胸に赤で×を描くと言いつ張り、仕方なく描かせたら角度を間違えてタテの十字になつてしまった。これが赤十字の始まりだとされている。

そうさ、対立してるのは意地を張つてる上層部だけで、一匹一匹が対立してるわけじゃない。子ども

「神様、わざわざお出でいただいて光栄です」ノアと家族が家から出て来た。「イエスとアンナは中におります。今朝ほど赤ん坊が生まれたので」

「それは目出度い。男かな？女の子かな」

「大きな男の子で、優しそうな目をしています」

「アンナは？」

「とても元気です。ダニエルから犬式のお産を教えてくださいましたが、かみさんが寝てると命令しました」

「よかった。俺からも寝てると言おう。人間は犬ネコと違って、すぐに動けるようにはできていない。ちよつと会つてもいいかな？」

「どうぞどうぞ、狭いですが中へ」

狭いどころか、神様には充分に広がった。ホテル・シオンより広そうだ。アンナは柔らかい藁のベッドに寝ていた。横にはイエスが付き添っている。

「ああ、神様が来て下さった。僕たちの子どもを見てやってください。すごくかわいいと思うのは親バカでしょうか？」イエスが誇らしげに言った。

うん、ちよつとそうかもしれない。人間の赤ん坊がかわいいと、神様は思ったことがないのだ。子ネ

コは『小さいネコ』と思えるけれど、赤ん坊を『人間の小さいの』とは、とても思えない。別の生き物にしか見えない。それでもベッドで寝ている赤ん坊は、これまで見た中で一番優しい顔をしていた。「おうおう、かわいいね。アンナさん、大変だったろう。ご苦労様。これでイエス二世ができた」

アンナは微笑んで「ありがとうございます」と小声で言った。

「ところで神様、ぜひ名付け親になっていただきたいのですが。アンナの名付け親も神様でしょ？ 親子二代で、こんな幸せなことはありません」と言いながら、イエスは半紙と筆ペンを持って来た。

「いいけどさ、名前を付けるのって、生後何日目かじゃなかった？」

「じゃ、それまでカナンにいてくれますか」

「俺は明日出発するんだよ」

「それでは今名前を付けてください。親になると僕も強いのです。子どものためなら妥協しません」

「わかったよ。でもちよっと待って。良い名前がスラスラ出てくるわけじゃない。外で考えてもいいか？」

神様とイエスは、いったん家から出た。一匹と一人になった途端、神様は面喰らった。イエスが号泣し始めたのだ。

「本当に、本当に行ってしまうのですか？ 僕が引きとめても無駄ですか？ 動物たち全部が引きとめても無駄ですか？」

「イエス君、嬉しいけど、出て行くと決めたのには理由があるんだ。俺自身の判断だが、好き好んで自分勝手に出て行くんじゃない。仕方ないんだよ。ここにいると、いずれまた隕石攻撃があるかもしれない」

「隕石でもミサイルでも降ればいいんです。神様がいなくなるほうが、よほど世の中が悪くなる。そう思います。それに、僕は何を頼ったらいいいのか」

「いいや、居汚く居座ってる弊害のほうが大きいんだ。一昨日までのカナン巡幸を見たかい？ キンキラキンの山車みたいな鞍に座ってたんだ。これがそのうち金銀財宝の玉座になって、俺の前に御簾が掛かって、カナンテレビが俺に敬語を使うようになったらどうする？ 俺は祭り上げられたくない。ちよっと間抜けな神様のままでいたい」

「なら祭り上げられなければいいでしょう。いいですか、神様は何もしていませんよ。親になると僕

世の秩序は神様が決めて、善悪も神様が決めて、そんな神様が見守っているから世界は成り立っています。僕の考える理想も、神様がいることが前提になってます。居てください」

「イエスよ、正しいけど間違ってる。世界はもう自立しているんだ。旧世界が滅びてから、俺が手を出す隙なんか無い。せいぜい人間の子どもたちに遊動円木を作ってやったくらいのもんだ」

「いえ、神様が作ったのはジャングルジムと鉄棒です」

「あはは、そうだった。ほら、何作ったかも忘れちゃう神様なんだ。頼りないだろ？」

「それでも神様は神様です」

「神様ねえ。思うんだけど、イエスの考える理想は、神様なんかいなくても実現する。理想の価値観は、もうこの世に育ち始めてる。旧世界の人間のように、自分たちだけに権利があるなんて思いつがる動物は、今後絶対に出てこないだろう。食って食われるのは自然の摂理だが、食うのは好きだが食われるのは

イヤだなんて、これからは誰も思わないだろうよ」

「そうでしょうか」

「疑うのは当然だな。ナザレでは悪いものばかりを見たから。だけど考えてごらん。今寄宿舎で育っている人間とネコの子供は、どっちが偉いなんていう発想さえないだろ。同じ生き物だ。寄宿舎で、他人より多くモノを欲しがるとはいるか？ なにかを独り占めする子どもはいるか？」

「少なくともベンダサンみたいなのはいません」

神様とイエスは、しばらく黙っていた。鳥の声が近くで聞こえ、遠くでは牛が話をしていた。

「わかりました。いえ、完全にわかったのではありませんが、やってみます。僕は神の孫です」

「うん、頑張ることはない。今までと同じでいいんだ。結局のところ、万事はなるようにしかならない」

「あまり応援になってませんね。でも、それが神様の考えなら、僕は従います」

「気は楽になったかな？ とところで、名前だったね。あの子に最初に何をやってほしい？」

「すべての生き物を愛してほしいです。小鳥でさえ怖がらずに近寄って来るような子になってくれたら

嬉しい」

「わかった。フランチェスコと名付けよう。ローマ人の名だが、多分、真実を貫いて生きてくれるだろう。もちろん最初のフランチェスコのことだよ」

神様とイエスは家に帰り、半紙に「命名 フランチェスコ」と書いた。

ノアは孫の名前が決まったのを喜び、薪拾いから戻ってきたアダムとイブもいっしょになって、自家製のワインで乾杯した。神様は一滴も飲めないの、赤ん坊の足元に座って『お前はフランチェスコだよ。善人中の善人、人間離れした潔癖性と正義感で生き抜くのだ』と話しかけていた。

神様自身にも不思議だったが、もうテレパシーを呼ぶ必要はなくなっていた。自分の考えが手に取るようにわかり、誰かと話をするにも正しい言葉がちゃんと口から出て来た。あいつはもう俺と合体したのだ。これで少しは賢い神様になっただろう。宇宙の真ん中でもやって行けるかもしれない。

「牧場を案内しましょうか」とノアが誘い、神様は「いえ、家族が暮らすだけで精一杯でしたから、家畜を増やすなんて、とてもできませんでした。ある日、母親にはぐれた子羊が助けを求めてやって来て、何日か世話をしました。そうしたら母羊も、その親戚も、牛や馬も集まってきました、『一緒に暮らそう』と言ってくれたんです。ですからこの牧場は私のものではありません。動物たちみんなのもです。私たちは人間という動物として、みんなと共同生活しています。これが自然な生き方なんですよ。ここにはもう迷った子羊はいません」

もうひとつ理想が現実になったと神様は思った。ノアの理念が中心になれば、世の中が多少変化したところで不幸になる動物はいないだろう。

「あのう、神様、お別れに当たって、ひとつどうしても胸に引っかかっていることをお訊きしたいのですが」

もう一度外に出た。

彼方まで広がる牧草地を眺めながら神様が言った。

「たしか、カナンに移民してきたときには、小屋のような家が一軒と、家畜が数頭だけだったね。連れてきた動物を全部野原に逃がして、牛と羊が少しとエドしかいなかったと憶えている」

「ええ。亡命希望の動物は私のものではないですから、自由に生きてもらうことにしました。だから、そう、おっしゃる通り、最初はそんなものでした」

「ネコはいなかったの？」

「むこうで暮らしていたときには何匹かいました。いろいろ手伝ってくれていたのですけど、最後の最後でネズミ捕りに夢中になって船に乗り遅れたようです。今でも帰ってこないかと待っています」

「ネコは『来い』と呼んでも来ないからね。それで幸福にも不幸にもなる。もう少し素直に作るべきだったかな」

「いえ、従順さと誇り高さは、時には相容れませんが、ネコは矛盾する両面と持った生き物ですから仕方ないんです。イエスからもうすぐネコが増える」と聞き

「俺に答えられることなら、何でも訊いておくれ」

「きつとお答えいただけると。つまり私は、生まれたいときからのエルサレム派信徒なんです。神様と出会って、本物の神様に親切にしていた後でも、私は思わず知らずエルサレムの神に祈っていることがあるんです。見たことも話したこともない神にです。自分では、神様とはネコの形をしていると理性ではわかってても、信仰としての神は、やはりエルサレム派の神なんです。これは間違いですよ」

「ずっと心に抱えてきたのだろう、ノアは一気に言った。」

神様は静かに聞き、そして答えた。

「ノアさん、あなたは間違っていないよ。正直なだけだ。何を信仰しようと、どの神に祈ろうと、あるいは祈るまいと、間違いなんてひとつもない。神様というのは本来は全部正しいものだからね。問題は『誰が』祈るかなんだ。間違った心の人間が祈れば、どんな神様だって悪い神様になる。『神の名において殺せ』とかいう結果になる。神様は何も言わない。『そりゃちがうぜ』なんて言ってくれるほど親切じゃない。間違った心の人間は、神様が何も言わないの

をいいことに、『神のお告げを受けた』とか『神は自分の側にある』なんて言いふらして、どんな行いも正当化する。それだけが間違いないだと思ふよ」  
「私の神は、私をただ見守ってくたださるだけです。私を許したりはしません」  
「そうだろうとも。エルサレム派の神は正しい神だ。どうだろうノアさん、今後あなたが正統エルサレム派として、教えを伝えて行くのは」  
「正當なんて、そんな。私はラビなどではなく、一人のただの信者でしかありません」  
「だから正當なんだよ」

そこにアダムとイブがやって来た。アダムはサル酒で少々ご機嫌が良いようだ。  
「おつ、ここにいたなネコ神。元氣そうじゃねえか。俺は悔い改めたよ、もう完璧」  
「姿形からはそう見えないけど」  
「外見で判断するなつて。あのなあ、俺に酒造免許を寄越せ。酒屋を始めるんだ」  
「酒屋？世界中に力ネなんかないよ。儲からないよ」  
「儲ける？そんなバチ当たりなこと誰がするかい。」

## 神の昇天

神様とマリアは十二匹の子どもたちを集め、みんな最後のマタタビをやった。「宇宙にもマタタビがあるといいね」キジシロが頭を床に擦り付けながら言った。マタタビはどちらかといえばダウナーだから景気付けにはならないけれど、家族の絆を確かめるには充分だ。

サルの雲タクシーが全員をアラファト山の頂に運んでくれた。見下ろせば山腹から山麓まで動物たちで埋まっている。こんなに來てるの？話す内容を考えてこなかった神様は、このときになって少し慌てた。俺はいつも手遅れなんだ。ここは才能だけで切り抜けるしかないな。

神様の姿を見て会場がざわつき始めたので、PA担当の熊の子は、カナンに唯一ある音源、キンブル音頭を流した。

「えーと、じゃ、そろそろ始めます。会場の様子はカンガルーとウサギのチームが撮影して世界中にリアルタイム配信されますから、できれば行儀よくし

そうじゃなくて、サルの酒も旨いが、俺が作ればもっと上等な酒ができる。実はもうブドウの苗木を植えてるんだが、それでワインを作って、飲みたいやつに飲ませるってわけさ。もちろん俺も飲むがな。カナンは天国だ。天国じゃ酒は無料って決まってるあ。いけねえか？」

「うむ、仕方ない。誰にも迷惑かけなければいいよ」  
「ありがてえ、これで免許皆伝だ」

次にイブが言った。

「あのお、動物劇団を作っても構わないかしら。発声と所作を基本から教えて、カナンの文化に貢献したいと思つてますの」

「動物劇団？そんなの旧世界にもなかったな。まあいいよ。希望者だけでやるなら」

「もちろんですわ。第一期研究生の卒業公演、神様が宇宙のどこにいてもチケットをお送りします。来てくださいいね」

できそうもないこと、特に将来のことについて、神様は約束しない。でも、イブの押しに負けて、神様は答えた。

「ああ、どうにか都合をつけよう」

てください。司会と進行は情報部のタイガです」と、これまでのマリアに代わってタイガが仕切った。

「それじゃ、司会者から言います。まず最初に神様がいなくなつて、ものすごく困る動物がいたら、今ここで言ってください。でも、悲しいとか、ただ困るとかは、それぞれの気持ちの問題なのでダメだよ」  
いきなり手を挙げたのはサルだった。いつも神様と悪ふざけをしていた連中だ。

「言つていいかい？ホテルの北側に住むサルです。あのお神様、麻雀の清算はどうする？計算するとドングリ八百六十個貸しがあるんだけど。チャラにしなきゃいけないかい？」

会場は爆笑に包まれた。「そんなに負けてたんだ」や「神様はいつも九連宝燈しか狙わなかったからな」等々、誰もが神様が弱いのを知っていた。

「あつ、ごめんね」神様がマイクを取った。「そんなになつてた？知らなかったよ。えーと、そうだな、俺の代わりにハナポチとクロが引き受ける。一年もすれば楽勝で返せるはずだ」

驚いたのは身代わりにされた二匹だった。顔を見合わせて、「一年だつてさ。千点キックの連発しか

ないね」「それだと八百六十回勝たなきゃならないよ」と暗い気分になった。

「はい、それじゃ麻雀の件は決まったとして、まだ誰かいますか？」タイガが訊いた。

手を挙げたのはボノボの母さんだ。

「神様がいなくなつて、どうなるか心配なことがあります。それはタブレットや撮影機材なんかですけれど、これからも配給されるのでしょうか。それとも、今のが壊れたらおしまいですか？」

「あつ、それならぼくにも答えられます。情報部ですから」神様が余計なことを言いそうなので、タイガが自分で答えることにした。「タブレットは新型が出るたびに今のと交換します。その他の機材はアマゾンで買ってください。神様から無期限で決済不要の楽園カードを預かってますからお力ネは要りません」

「そうか、あのカードは誰が払ってたんだ？」神様が呟いた。

すると、雲の上あたりから声が聞こえた。

「やだなあ、知らないでカード使つてたの？天使が払ってたんですよ。ガブリエルとルシファーが半々

で。まあたいした金額じゃないから、これからも払いますけど」天使の声だった。

「済まないね、どうも。今後ともよろしく」神様は天に向かって大声で言った。

どうも荘厳な雰囲気からはかけ離れている。父である神様の『昇天の儀』らしくしようと努力しているのに、厳粛にも重厚にもならない。これから神様がしゃべれば、事態はもつと軽々しくなるだろうが、タイガはあきらめて、神様としゃべりを代わることにした。

「じゃ、その他の心配は、後でぼくらに言ってもらうとして、旅発ちの際して、神様が何か言いたいそうですね。どうぞ」

「どうも、神様です。そんなに負けが込んでたとは知らなかった。許してくれ。カードの件も、まったく気にしてなかった。考えてみれば決済しなくていいのは不思議だよ。まあ、全部済んだことだ。気にするな。俺も気にしないから。」

それで、悪いけど今日、俺はこの世界から出て行くことにした。みんなは『相談もなしに』なんて怒ってる？怒って当然だよ。勝手に世界を作つて、

気が向いたらぶいど出て行く。神様って一体何なんだ、つて思うだろう。それ、当たってる。おれ自身、ナンなんだって思うもの。

でも、悪意があつてやつてるわけじゃない。最初はヒマつぶしと好奇心だった。宇宙を漂流していると、極限までつまんなくなるんだ。それで、遊びで作り始めたのがこの世界っていうわけ。それが段々と大ごとになって、ついにはカナン以外が爆発するみたいに滅亡した。そんなことが最初からわかってたら、この世界は作らなかつたよ。

後悔してるかっていうと、そうでもない。逆だな。満足してる。気に入らない旧世界が滅びて、もう一度カナンから新世界が始まってる。今度は失敗しないだろう。みんなが思い切り生きられる世界になるって予感がする。実際、今そうだろう？

旧世界の人間がやったような、進歩やら発展やらは要らない。そんなもの目指すから不幸な動物が出てくる。発見や発明は大切だよ。みんなが暮らしやすくなるから。たとえば海岸沿いで暮らしてるサルの諸君は、貝殻を石で割る方法を見つけたそうだね。それ、動画付きでネットに上げとかない？森

の中のサルが木の実を割るのに応用できるかもしれない。みんながそうやって教えつすれば、生活はどんどん便利になる。誰も損しないで、世の中は進歩する。そういう進歩、発展ならいいんだ。

そうだ、ひとつだけマジに進歩させてほしいものがある。薬と医療技術。天使の診療所を中心にして、薬草のデータをみんなで蓄積しないか？怪我や病気の対処法を考えない？カナンに足りないものがあるとするば、それだけだ」

「あたしが連絡係になるう」タンゴが大声を上げた。「あつしもやりましょう」トラの親分が言った。

「だ、そうだ。詳しいことはみんなで相談して決めておくれ。相談していえば、これまでもカナンで重要なことは内閣で相談して決めてきた。まあ、何度かは俺の独断でやったけど。カナンを月まで持ち上げる、とか、地上に戻す、とかだけだよ。内閣についていても偉いわけじゃなくて、みんなの御用聞きみたいなもんなのは知ってるね。これまでは行き掛かり上、俺の子どもとマリアがナントカ大臣なんてやってた。もし内閣で仕事をしたい動物がいたら、多分、即交代してもらえらるだろう。ネコ族だけが内閣をや

れるんじゃない。どんな動物でもいいんだ。仕事さえしてくれば。

そのマリアの総理大臣だけど、実はマリアは俺といつしよに旅に出る」

「よっ、ご兩人」「待ってました」「たっぷり」など、様々な声が掛かった。たっぷりの意味はよくわからなかったが。

「まあまあ、これも俺のわがまま。許してくれよ。だつてさあ、宇宙空間に何万年も一匹でいるのつて、面白くもなんともないんだ。最後には右手と左手でジャンケンしたくなるくらいヒマ。せめて話し相手でもいればと思つて。」

なんだつて、そう、マリアの総理大臣は、今日限り廃業になります。それでもつて、誰か新しい総理大臣にならないかなつて思うんだけど、希望者いる？手を挙げてよ」

みんな揃つてざわついた。聴衆は誰が立候補するか興味津々だし、山上では、そんなこと聞いていなかったマリアの子どもたちが『どうする？誰かやる？』とゴソゴソ相談していた。

結局、誰も手を挙げなかったので神様は言った。

佐役を付けよう。そうだな、まずボノボの母さんはどうだ？思考力はカナンで一番だから。それから、旧世界の仲間つていうことで犬のダニエル。人間の付き合いが長いから、人間対策には適材だな。うーんと、最後にカナン軍の大將。サルの大將、上がつて来いよ」

神様が呼ぶより早く、カナン軍総司令官が山頂に立った。

「ご紹介に預かりましたカエザルです」

「総理大臣の補佐、やつてくれる？」

「もちろん。カナンのためなら、この一身を投げ打つても、」

「わかつたわかつた。これからは軍を動かすときには、内閣の仲間とよく相談しておくれ。文民統制つてやつだ。はい、これでフルメンバー。もちろん俺の子どもたちは、誰かと交代するまで現在の仕事をすること、こんでいいかな？」

麓から山腹にかけて、「異議なし」の声で満ちた。

「なんか、最後に来ているんな大切なことを決めたみたいだな。ほら、俺にも決める力はあるんだよ。自分でも安心した。もう言うことはほとんど無いけ

「だよね。究極のサービス業だから、好んでやるもんじゃない。だけど、いないと困るでしょ。俺が指名しよう。断りっこなしだよ。会場に来てるはずだけど、おーい白ネコ、上がつて来いよ」

麓から動物たちをかき分けて白いオスネコが駆け上つてきた。

「えーっ、聞いてないよ。なんであいつなのよお」マリアは、神様から話を聞いていなかった。「創世記の十日目くらいで雲隠れして、どっかで野垂れ死んでもいいのに帰つてきて、それで総理大臣？」

神様はマリアを無視して白ネコを出迎えた。

「紹介しよう。名前はたしかシメオンだったね」

「はい、そうです。シメオンといいます」

「このネコはね、マリアのシツポから生まれたんだ。きつと同じDNAだよ。マリアと同じ程度の能力があるはずで、しかも旧世界で苦労してきたから、もう少しは思慮深くなつてる」

「どうせアタシの思慮は浅いですよ」空いているマイクでマリアが言い返した。神様はそれを無視して、「サービス業の実績はなさそうだが、みんなを支えれば総理大臣くらいは務まるだろう。心細ければ補

ど、余計なことを最後に言つてごう。

俺は何かの拍子で神様になつただけで、ちつとも偉くない。俺の写真や絵を拝もうなんて、絶対にしないでくれ。神様を人格化しちやいけないう。人格化は迷信と盲従の始まり。そんなことされるなんて、どんな神様も望んじやない。人格化は神への冒瀆なんだ。もし俺の写真を飾りたいなら、どこかの壁に貼つてダーツの的にでもすること。決して額縁には入れないでね。

また戻つてくるかどうか、正直わかんない。でも、宇宙のどこにいてもカナンを忘れない。みんな元気だね。そんじやバイバイ」

瞬間、神様とマリアの体が揺らいだように見え、火花が上がるよりも速く天に昇つて行つた。

世界から神様がいなくなった。



何百年か何万年か経った。

「おいマリア、いるか？」神様が言った。

マリアが答えた。「あなたの隣にずっといるよ。できればその重くて汚いケツをアタシのシツポの上からどけてくれるかな」

「えっ、シツポ？なんかお尻の下がゴロゴロするどずーっと思ってた。悪かったね」

「あー、スッキリした。やっとシツポに血が回り始めたよ」

「なあマリア」

「なによ」

「いつ言おうか」

「なんて」

「光あれ、って」

世界が明るくなった。

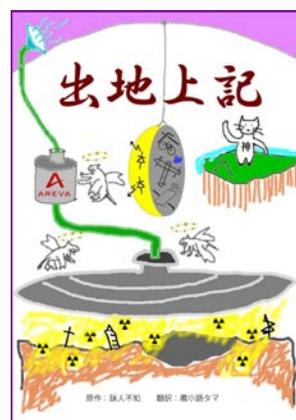
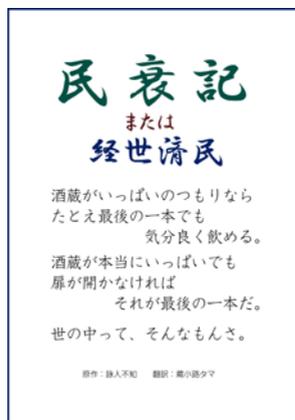
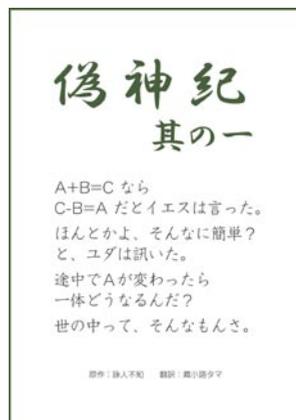
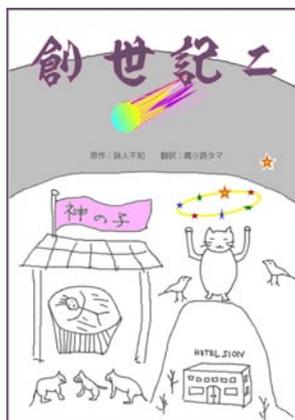
「神は存在するか？」なんて言ってるなら。このテキストによれば、宇宙に存在するのは神様だけで、その他モロモロは神様に認識されるから存在することになってる。そんなあ、怖いよ。アタシはどっなるの？蔵小路の家族は？仲間のネコたちは？神様の気が変わった瞬間に消えるの？

なあんでね、ネコは絶対に思わないの。考えるには考える。だけど目の前でピラピラ動くモのほつが面白いし、自分がいなぎや始まんないとも思ってる。あっ、人間もそうか。なんだかんだ言っても自分が一番。

えっと、ここで訂正がひとつ。創世記あたりで、アタシは「世界の始まりが書いてある」とか「ここで真実が語られる」とか書いた。微妙に違ったみたい。完全に違ったんじゃないやなくて、どっもどっもその世界のお話だったみたいね。「これはこの世のことならまず」で始めればよかったのかも。

残る最大の問題は、一体誰が書いたの？ってこと。タロとギンタは独自の推測をしている。長野の長老は「異星の生物じゃ」と決めてかかっている。ハナボチは「もちろんネコです」って言うし、アタシはどっや見当も付かない。こないだ野川でみつかったタイガー魔法瓶で何かわかる気がするけど、しばらくはトイレットペーパー見るのもいやなんで、気が向いたら調べるね。

んじや、またね。



著ネコ近影



やっと終わったね。  
あんたが生まれる前からやってたんだ。  
勉強してアタシのようになりなさい。



ボクはもう全部できる。  
次からはボクが一匹で書くから、  
タマさんは遊んでいいよ。  
ベッド壊すのって最高に楽しい。

新創世記

ジャライ暦 1393年8月12日  
フツの西暦では2014年11月3日  
著ネコ：蔵小路タマ（イラストも）  
仕方なく著作権管理させてる人：大塚明  
いないだろうけど、転載するときは管理人  
に言ってね。黙ってやったらヒッカク！